

ハチクマ *Pernis ptilorhynchus* (Temminck)

【選定理由】

夏鳥として丘陵地から標高 1,000m の山地にまで生息するが、繁殖期の行動圏が他のタカ類とは比較にならない程広いことで、繁殖期の詳細な生態については不明な部分が多い。育雛期の餌をハチ類に大きく依存していることや、これまでに知られている県内の営巣地の大半が人里近くの林であることから、開発等の影響を受けやすい種と推測される。

【形態】

全長は 57～60.5cm、翼開長 121～135cm。翼は長くて幅広い。羽色は淡色から暗色までバリエーションがあり、さらに雌雄や年齢で異なる。雄成鳥は尾の黒線が太く、眼の色は暗色。雌成鳥の眼は黄色で、幼鳥の場合は暗褐色であることが多い。幼鳥は、飛行時に初列風切の先端部が広く黒色に、次列風切が暗色に見える。



愛知県, 2002年7月11日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に丘陵地から山間部に生息し繁殖する。春秋の渡りの季節は、県内全域で見られる。

【国内の分布】

夏鳥として北海道、本州、四国、九州に飛来して繁殖する。

【世界の分布】

ヨーロッパから小アジア、バイカル湖を経てロシア東北部、中国東北部、日本、インドから東南アジアにかけて繁殖し、アフリカ、東南アジアで越冬し、6亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期に平地近くから標高 1,000m の山地までの環境に生息し、丘陵地や山地で繁殖する。繁殖期の行動範囲は時に巣から 30km と他のタカ類の 10 倍を大きく超え、営巣地近くへの侵入者を排除する行動も少ない。アカマツやナラ類などの樹上に営巣し、育雛期の餌のほぼ全てがハチ類の幼虫や蛹で、ハチ類の少ない繁殖前期はカエルやカナヘビ、ヘビなどを捕食する。春の内陸では 4 月中旬から、秋の伊良湖では 11 月上旬頃まで観察されることもあるが、通常は 5 月上旬から 10 月上旬まで県内に生息する夏鳥である。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖期の行動範囲が広大で、他のタカ類のように明確なテリトリーの確認が困難であるため、正確な生息密度の把握は困難であるが、現在県内の生息数は多めにみても 50 ペア程度と推測される。県内で繁殖分布が縮小したと思われる箇所では、平野部やその周辺の丘陵地にあった営巣地が、都市化によって消失した場所も少なくないと思われる。

【保全上の留意点】

本種にとって最も重要な餌はハチの仲間である。国内で最も多く食べているのはスズメバチの仲間であるが、クロスズメバチは食用として人間と競合しており、キイロスズメバチは近年危険生物として、野外でも駆除の対象とされている。これからの時代、人間の文化を含め全ての生物が共存できる環境作りや、そのために必要な教育なども大切と思われる。

【特記事項】

近年、人工衛星による追跡で渡りのコースや時期などが明らかにされており、渡りの途中を含めこの種の生活がハチ類に大きく関わっていることが解明されつつある。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.50-52. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)